

英米文化の背景

英米人の迷信・俗信考 (17) IV 年中行事

—その6 初穂祭・収穫感謝祭・万聖節の前夜祭・ 火薬陰謀事件記念日・アメリカの感謝祭

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2008年10月1日 受理)

はじめに

いずれの時代においても、またいかなる文化においても、人々は諸祭を催し諸行事を行ってきた。人々は彼らのそれぞれの生業における豊かな実りと平和な日々を願い、今日と未来の幸福を希求しつつ生きてきたのである。単調になりがちな日々の生活の中で、自らの心と体に活力を与えるものとして諸祭、諸行事は人々にとって欠かせないものであろう。今号では、初穂祭、収穫感謝祭、万聖節の前夜祭、火薬陰謀事件記念日、そしてアメリカの感謝祭等の習慣とそれに関わる迷信・俗信の考察を試みたい。

1 初穂祭 Lammas 8月1日

スコットランドの人々は初穂祭 Lammas と呼ぶ祭りを行う。元来この初穂祭は、古代ケルト人が太陽神を敬った祭りであり、往時イギリスではこの日に秋の実りを感謝する収穫祭を催した。ラマスとは「パン(塊)のミサ、パン(塊)の祭り」を意味する 'loaf-mass' に由来していると言われ、その年の収穫の始まりを感謝する祭りであった。中世の教会では、この日には、最初に刈り取った小麦の束か、あるいはその新たな小麦粉で作ったパンを祝福して神に捧げる儀式が行われていた。

現今では、9月～10月の間に各地の教会を中心に収穫感謝祭 harvest festival を行うのが一般的であり、この8月1日の初穂祭にはそれに代わって定期市 fair が開かれている。定期市は大小の都市で数日に亘って開かれ、それに絡めて娯楽や運動競技が盛り込まれ、多くの遊樂的な催しがなされる。

またこのラマスの祭日には、「ラマス共有地」'Lammas Land' と呼ばれる定期共有地が翌春まで共用の放牧地として一般に開放される日でもある。この共有地はそれ以外の期間、春から夏にかけては共有権保有者たちが作物や干し草を作るために使用される。人々にとっては作物作りも大切であるが、家畜の飼育がうまくいくこともまた極めて肝要なことであり、スコットランドの高地地方では、かつて次のようなことが言われていた。

☆ 「邪眼から牛を護るには、ラマスの祭日に月経の血を牛にふりかけるとよい。」

この信に関して、Radfordに次の記述があり、ほぼ内容が同じであることが確認できる。

To preserve a cow from the Evil Eye, sprinkle menstruous blood on the animal on Lammas Day.¹⁾

またこのラマスの祭日には、人々は家庭を護るためにも同様のことを信じていたとされ、Radfordに同様の記述が見られる。

☆ 「ラマスの祭日に、戸口の柱や周辺に月経の血（液体）をかけておけば、一年間、家は害から護られる。」²⁾

これらからは、かつては月経の血は、悪魔、悪霊、邪眼等の魔力封じに役に立つと考えられていたことが窺われる。

スコットランドの高地地方では、ラマスの季節は「ルーナサア」、つまり、ケルトの神ルーグLughの祭りであり、大集会、大かがり火焚き、競技会などの祝賀行事が催されていた。また今日でもこの時期は、他の「四季支払日」‘Quarter Day’と同様に、悪魔や妖精が横行する日と信じられ、運勢占いの好機とも考えられており、次のものもその一つである。

☆ 「未来の恋人の居場所を知りたければ、テントウムシに願い事を告げて放してやるとよい。」

Lady, Lady Lanners	テントウムシ、テントウムシ
Take your cloak about your heid	マントを頭に引っかぶり
And fly away to Flanders	フランドルまで飛んでゆけ
Fly ower moor and fly ower mead	荒れ野を越え、牧場を越えて
Fly ower living, fly ower dead	人里を越え、墓地を越えて
Fly ye east or fly ye west	東に向かい、西に向かって飛んでゆけ
Fly to her that loves me best. ³⁾	いとしい人のところまで。

因みに、このラマスにはかつて「試し結婚」‘handfast marriage’と呼ばれる習慣が見られた。Charles Kightlyがこれについて記述するところでは、ラマスの日に開かれる定期市は「試し結婚」の契りを結ぶ機会として有名であって、そこで一緒になった2人は、1年間の試し結婚後別れる道を選んでも、離婚者とみなされなかったようである。⁴⁾

2 収穫感謝祭 Harvest Festivals 7月～9 (10) 月

イギリスが産業化されるまでは、人々の多くは田舎に住み、自分たちが栽培する農産物で生活していたので、人々にとっては収穫の時期は一年で最も大切な時期であった。

収穫作業で、最後の束は収穫女王 Harvest Queen と呼ばれ、その束（小麦の人形）はり

ボンや花やツタの花環で飾られ、最後の荷車に乗せられ、人々の歌声のなかで農場へと運ばれた。そしてそれは次の年のそれに代わるものが出るまで保存され、焼かれたり土にすき込まれたりしたが、その宿る霊のために決して捨てられることはなかった。18～19世紀には、蹄鉄型やうちわ型の小麦の人形まで作られるようになったとされ、今日ではこの小麦の人形作りはまたしても大いに人気を博しているようである。

人々は、収穫のありがたさに感謝して教会を果実や野菜で飾り、感謝の祈りを捧げる。この収穫については農産物ばかりではなく、海産物についても同様であった。例えば、コルチェスターやエセックスでは、9月にカキ漁が始まる前に、カキの収穫に感謝がなされる。漁業に依存する地域では、「海(船)への祝福」'Blessing on the Waters (or Boats)'が行われる。ダラム郡のノースシールドでは、漁港の埠頭で漁船や漁網が祝福される。また、デヴォンのブリックスハムやヨークシアのフランブラでは、海産物の収穫、つまり海の幸への感謝の礼拝が行われ、教会は漁網や漁業用の歯車等で飾られる。ロンドンのピリングズゲート旧魚市場の教区教会であるセント・メアリ・アト・ヒル St. Mary-at-hill 教会では、入手できるすべての種類の魚が、入り口に置かれた大きな平板の上に並べられる。かつては、英国国教会の教義である三十九か条 Thirty-Nine Articles を記念して、39種類の魚が並べられるのが慣例であったと言われる。礼拝式が終了すると、供えられた海産物類はすべて養老院等の慈善施設に提供されることになっている。なお、こうした供えられた農産物や海産物が慈善施設に提供される慣習は、今日すべての収穫感謝祭において遵守されている。⁵⁾ まさに、この国の人々の心の温かさの一面が窺われる思いである。

3 万聖節の前夜祭 Halloween (Hallowe'en) 10月31日

かつてケルト民族は11月1日に新年を迎えると、彼らはそれを「冬の始まり」とした。彼らは、サムハイン Samhain の祭りを祝ったが、その前夜にあたる「冬の前夜」'Winter's Eve' と、新しい年の元日を祝う習慣があった。つまり10月31日の夜は、ケルト民族にとっては1年の分岐点にあっていた。この分岐点の日には、死者たちの霊が生家に戻り、夜通しその周囲を徘徊し、また同時に、超自然のあらゆる種類の聖霊が、特にこの夜には恐るべき魔力を発揮して人里に群がり、人々に危害を加えるものと信じられていた。

キリスト教会は、この異教の祭りにキリスト教的意味づけをし、またその信徒たちを保護する目的で11月1日を万聖節 Feast of All Saints (or All Hallows) と定めて諸聖人の霊を祀り、その翌日の11月2日を万霊節 All Souls' Day として、すべての死者たちに対して祈りを捧げる日と定めた。Hallows (or Saints) とは聖徒の意味である。ハロウィーン Halloween とは、11月1日の万聖節 All Hallows (or All Saints) の前夜の祭りをさす。

万聖節の前夜祭 All Hallows' Even、つまりハロウィーン Halloween には、かつては生家に戻ってくる死者の霊のためにさまざまな行事が行われていたとされるが、今日ではソウル・ケーキや小銭の喜捨を求めながら戸別訪問するソウリング Souling の風習がわずか

に残っている他はほとんど廃れてしまった。イギリスの北部地方や西部地方の各地には、子供たちが悪魔や悪霊を演じて思い思いの変装をして、ちょうちんをさげ、隊を組んで街を練り歩きながら軒並みにドアを叩き、キャンデーや小銭をねだる風習がある。最近では、'Trick or Treat' と呼ばれる遊びも行われ、「お菓子をくれないと悪戯するぞ!」と触れながら近隣を巡る。(アメリカでも子供たちによる同様の遊びが行われているが、これは本来イギリス起源のものである。)

ハロウイーンが本来、新旧の年の境目である点から、古来各種の占いがよくなされてきた。特に恋占いや結婚占いがよくなされたようである。

☆ 「ハロウイーンにロウソクを手にしてリングをかじりつつ鏡を見つめると、肩越しに将来の夫となる人が同じ鏡を覗く」と言われる。Robert Burns, *Halloween* (1786年) に次の用例が見られる。

Wee Jenny to her Graunie says, "Will ye go wi' me, Graunie? I'll eat the apple at the glass, I gat frae uncle Johnie." ⁶⁾

(おちびのジェニーが彼女のばあ様に言う。「一緒に行こうよ、おばあちゃん。わたし、鏡の前でジョニーおじさんのくれたリングを食べるんだもん。」)

☆ 「ハロウイーンに、若い独身女性がリングを持って鏡の前に立ち、9つに切ったリングをナイフに載せて、鏡を覗き込みながら左肩越しに差し出すと、それを取ろうとする未来の夫の姿が鏡に映る」と言われる。 ⁷⁾

☆ 「ハロウイーンに一人で家を出て3つの領地の境界が接しているところを流れる小川まで行く。その水に自分の着ているシャツの左袖を浸し、誰とも話をしないで家に戻る。濡れたシャツを寝室の暖炉の前に干しておき、火の見えるところに横たわり眠らないでじっと見ていると、真夜中頃にシャツを裏返すために未来の伴侶が姿を現す」と言われる。 ⁸⁾

次のものは、結婚相手の素性を知る占いである。

☆ 「三枚の皿を置き、占われる人が這って行き、どの皿に手を入れるかで、その素性が判る」とされる。先述の Robert Burns, *Halloween* の注釈に次の記述が見られる。

Take three dishes ; put clean water in one, foul water in another, and leave the third empty; blind-fold a person, and lead him to the hearth where the dishes are ranged; he (or she) dips the left hand: if by chance in the clean water, the future husband or wife will come to the bar of Matrimony, a Maid; if in the foul, a widow; if in the empty dish, it fortells, with equal certainty, no marriage at all. It is repeated three times; and every time the arrangement of the dishes is altered. ⁹⁾

(3枚の皿を用意して、1枚にはきれいな水を、2枚目には汚れた水を、残りは空にしておく。占われる人を目隠しして、皿を並べてある暖炉のところへ連れて行く。彼(あるいは彼女)は左手を皿に浸す。それがたまたまきれいな水の皿ならば、婚姻届の役所と一緒に訪れることになるのは初婚者であり、汚れた水の皿ならば再婚者、空の皿ならば、これらの場合と同様の確かさで結婚できないことになる。これは3度繰り返されるが、その都度3枚の皿の位置は変えられるものとする。)

☆ 「ハロウイーンに、乙女が剥いたリンゴの皮を次の呪文とともに左肩越しに投げれば、その皮が未来の夫のイニシャルを作る。その際の呪文は、『聖サイモンとジュード様、お願いします。手に持ちますこの皮でお教えてください。今日すぐにもお教えてください、ほんに愛しいお方のイニシャルを』である。」この用例として、D. H. Lawrence, *The White Peacock* (1911年)に次の記述が見られる。

She stood up, holding up a long curing strip of peel "How many times must I swing it, Mrs. Saxton?" "Three times — but it's not All Hallows' Eve." ¹⁰⁾

(彼女は立ち上がった。手には長くねじれたリンゴの皮を持っていた。「何回振らなくてはいけないのかしら、サクストン夫人。」「3回ですよ。一でも、今日は万聖節の前夜ではないわねえ。)])

こうした場合に、もしも投げたリンゴの皮がちぎれてしまい文字を作らなければ、その娘は生涯、独身で終わると言われる。

スコットランドの田園地方には、妖しげな恋占いがある。

☆ 「ハロウイーンの夜、一人で炉のところへ行き、その通風管の中に青色の毛糸玉を投げ入れ、その糸を糸巻きに巻き取っていく。すると誰かが毛糸玉を抑えているかのように糸が巻き取れなくなる。そのとき毛糸玉に向かって『誰が抑えているの?』と問うと、通風管の中から未来の配偶者の洗礼名か苗字が聞こえてくる」と言われる。¹¹⁾なぜ毛糸玉は「青いもの」と限定されるのか、その根拠は不明である。

次のものは、またしてもリンゴを用いての恋占いであるが、特にスコットランドやウェールズでは、今日でも子供たちの遊びとして残っている。

☆ 「たらいのような大きな容器に水を入れ、多くのリンゴを浮かべ、そこに顔や手足を突っ込んでそのうちの一つを口にくわえる。くわえたリンゴの持ち主がその者の恋人ということになる。」

なお、ウェールズでは、水の中にリンゴのほかにコインを入れたりもする。こうした遊びは、水の中にひょいと頭を潜らせるので、そのしぐさがアヒルやカモに似ているところ

から、'duck apple'「水中リンゴくわえ遊び」と呼ばれる。また、この種類の遊びには、水中のリンゴを口にくわえたフォークで突き刺す遊びもあり、'forking for apples'「水中リンゴのフォーク刺し遊び」と呼ばれている。

上記のリンゴを用いた古い遊びは、実はケルト民族のドルイド僧の行う宗教儀式に由来するものとされる。リンゴそのものは<不死> (immortality) の表象であり、¹²⁾ <水の中をくぐってリンゴの国、つまり不死の国へ行くこと>を象徴しているとされる。

ハロウイーンの占いには、未来の伴侶の風采、職業、身分等が占われるものもある。

☆ 「ハロウイーンの夜、一人で納屋に行き2つの戸口を開けておく。そして、み[箕]を手にして風の吹く方角を考えて、まるでみにモミが入っているかのように揺すり、モミガラを風で飛ばすしぐさを3回する。そのとき風の入ってくる戸口からすっと人影が入ってきて、その人影はもう一方の戸口から出て行くはずである。その人影こそはその者の未来の伴侶なのである。その人影をよく見ていれば、その風采、職業、身分等が窺われる」とされる。¹³⁾

先述の Robert Burns, *Halloween* の注釈では、Burns がキャベツを用いた占いについても言及している。その概要は以下の通りである。

☆ 「若い男女が数名で手をつなぎキャベツ畑へ出かけ、皆が目隠しをして、各自がキャベツを1つずつ引き抜く。その茎が大きいか小さいか、まっすぐか曲がっているかで各自の結婚相手の体格や容貌を占う。茎が大きくてまっすぐなものが吉とされる。次に、根についている土の多少で結婚相手の貧富を占うが、土が多いほうが吉とされる。次にナイフで芯を切り、口に入れてその味を試す。甘い味がすれば吉であり、結婚相手は好人物と判じられる。最後にそのキャベツの茎 (ラント runt と呼ばれる) を家に持ち帰り、戸口の上辺りに並べて置く。そして、そのまま待っていて、偶然家に入ってくる人物のクリスチャン・ネームが、ラントを並べてある順で、その者の結婚相手のクリスチャン・ネームだとされる。」¹⁴⁾

万聖節の前夜はかつてのケルト民族の一年の分岐点の日とされたが、キリスト教会もケルト民族の異教の習慣に似合わせた習慣を築き、そこには文化的融合一体化が窺われる。特にこうした1年の分岐点にあたるというところから、超自然的な力が大いに働く日とされ、この日には実に多様な占いがなされたようであるが、今日では廃れたものも少なくないようである。

4 火薬陰謀事件記念日 Guy Fawkes Night 11月5日

イギリスでも、カトリック教徒とプロテスタント教徒の争いは果てることがなかった。特に17世紀初め頃には、カトリック教徒は弾圧を受け、彼らは更なる迫害を受けることを大変恐れていた。

伝えられるところでは、1605年、カトリック教徒の一団の人々が、同じカトリック教徒

で軍人のガイ・フォークス Guy Fawkes に助けを求め、国会議事堂の爆破により国王と議会関係者たちを亡き者にする計画を持ちかけたとされる。その企てには彼の他に7人の人々が加わっていたが、そのうちの一人が自分の義理の兄弟に手紙を送り、議会の始まる日には国会議事堂には行かないようにとの警告をした。それがもとで陰謀事件が発覚し、国会議事堂の地下室から大量(36樽)の火薬が発見された。ガイ・フォークスは取調べを受けたとき、火薬爆発に必要なマッチやその他の器具を所持していたとされる。ガイ・フォークス等の一味は捕えられ、拷問を受けた後、大逆罪で処刑されたと言われる。

この大事件で、国王や王族、また貴族、聖職者、議員その他の議会関係者等多数の人々の尊い命が救われたことを忘れまいとして、11月5日を火薬陰謀事件記念日としている。英国国教会では記念の礼拝が行われ、次のような感謝の祈りがなされる。

'We yield thee our unfeigned thanks and praise, for the wonderful and mighty deliverance of our late gracious sovereign King James the First ... with the Nobility, Clergy and Commons of this Realm then assembled in Parliament, by Popish Treachery appointed as sheep to the slaughter in a most barbarous and savage manner ...'¹⁵⁾

(私達はあなたに深甚なる謝意と賛美の言葉を捧げます。今は亡き仁愛深き国王ジェームス一世の危機を、かくも見事に回避できるようにお導きくださったことに対して、、、国王のみならず、当時国会議事堂内に参集したこの王国の貴族、聖職者、議員たちを、かかる残忍卑劣な手段により、一瞬に屠らんと企図したカトリックの反逆者たちの陰謀を、暴き出すことができたことに対して、、、)

またこの日には、主として子供たちによる 'Bonfire Night' 「ガイ・フォークス人形の引き回しと焼き捨て」と呼ばれる行事が行われる。子供たちが行うこの人形の焼き捨てるの行事については、彼らはこの事件の首謀者ガイ・フォークスに似せた等身大の人形を作り、自分たちも面を被り、次のような歌を歌いながら家々を回り、人形を町中引き回した後に、最後にはそれを焼いてしまうのである。

Remember, Remember, the fifth of November,
Gunpowder, treason and plot.
There seems no reason why gunpowder treason
Should ever be forgot.¹⁶⁾

(忘れないで、忘れないでくださいよ、11月5日を、
火薬、反逆、陰謀事件を。
火薬陰謀事件が忘れられるべき理由など毛頭ないと思えます。)

国の政治の向きと、また宗教対立の大きな渦の中では、とかく政変や革命が起きがちなことは歴史が語る場所であるが、イギリス国の転覆を計画したこの火薬陰謀事件を神に護られることによって未然に防ぎ、人々の命と国を守ることができた記念として、人々は長くこの事件を心に留めることであろう。

5 アメリカの感謝祭 Thanksgiving Day, U. S. A. 11月第4木曜日

アメリカの感謝祭のルーツは、ピルグリム・ファーザーズ Pilgrim Fathers の人々が新天地で初めての収穫を得たとき、神に感謝して催した3日間の祭りである。かつて1600年9月6日に102人のオランダ人とイギリス人の一団がメイフラワー号 Mayflower で出発し、命がけで大西洋を渡り、12月末にアメリカの北東部マサチューセッツの現在のケープ・コッド湾に到着した。彼らは新天地に丸太小屋を立て、翌年1621の春に土地を耕し種を播いた。彼らは友好的なインディアンたちからトウモロコシ、ジャガイモ、カボチャ、クランベリー等の栽培法を教わり、また野生の七面鳥の捕獲と飼育の方法をも学んだ。やがて秋になって初めての収穫を終えたとき、彼らはその実りに対して感謝の祭りを催した。彼らは大いに力になってくれたインディアンたちを招き、11月末の木曜日から3日間の収穫感謝祭を行ったとされる。今日でも感謝祭が木曜日に催されるのは、最初の感謝祭の開催曜日に由来するのであろう。

以来、アメリカの農民たちは収穫感謝祭 harvest festival を行ってきたが、1863年まではそれぞれの地域で断続的に行われていたと考えられている。この1863年には、リンカーン大統領 President Abraham Lincoln が収穫感謝祭 Thanksgiving Day を11月最後の木曜日と定め、国民の祝日(学校は当日とその翌日も休日)とした。さらにそれは後に、フランクリン・ルーズベルト大統領 President Franklin Roosevelt により11月の第4木曜日に修正された経緯がある。

感謝祭の日には、教会での礼拝が行われ、また一般に、各家庭では感謝祭のご馳走が用意され、他所に出かけている家族も帰省して家族団欒の時間が過ごされる。なお、感謝祭のご馳走で欠かせない伝統的品目は七面鳥 turkey である。恐らくは1621年の最初の感謝祭にも食されたものであろうが、確証はないとされる。¹⁷⁾ 因みに七面鳥料理は、アメリカであれイギリスであれ、クリスマス Christmas を祝う際にも、その食卓には欠かせない品目とされている。

[次号「クリスマス」等に続く。]

Acknowledgements:

貴重なご教示をいただいた Amy Chavez 氏(元、中国短大講師)に、感謝申し上げます。

Notes:

<今号のNotesには、既刊の拙論『英米文化の背景 英米人の迷信・俗信考 (6) III 恋と結婚 その1』(倉敷芸術科学大学紀要第3号)のNotesと重複するものが一部含まれる。>

- 1) "Lammas," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E & M. A. Radford (New York: Philosophical Lib., 1949; New York: Greenwood, 1960).
- 2) "Lammas," Radford.
- 3) "August 1," *The Perpetual Almanac of Folklore*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1987).
- 4) "Lammas," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1986).
- 5) "Harvest Festivals," Kightly, *The Customs and Ceremonies of Britain*, 135.
- 6) "Halloween," 109-12, *Burns Poems and Songs*, ed. James Kinsley (1969; Oxford: Oxford UP, 1970) 126.
- 7) "Halloween," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 126 (L).
- 8) "Halloween," *Zolar's Encyclopaedia of Omens, Signs & Superstitions*, ed. Zolar (London: Simon & Shuster, 1989) 186.
 Going alone to a stream where "three lairds' lands meet" and dipping in the left sleeve of a shirt was another tradition. When done, one would return home, without speaking, and hang the sleeve to dry before the bedroom fire. One should go to bed, being careful to remain awake. It was said that the form of a future helpmate would enter the room and turn the sleeve in order that the other side might dry.
- 9) "Halloween," Footnote, Kinsley, 130.
- 10) D. H. Lawrence, *The White Peacock*, I, VIII, The Cambridge Edition of *The Letters and Works of D. H. Lawrence*, ed. Andrew Robertson (Cambridge UP, 1983) 92.
- 11) "Halloween," Footnote, Kinsley, 125.
- 12) "Apple," 2, *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam: North-Holland, 1974).
- 13) "Halloween," Footnote, Kinsley, 128.
- 14) "Halloween," Footnote, Kinsley, 123.
- 15) "November 5" Kightly, *The Perpetual Almanac of Folklore*.
- 16) Margaret Joy, *Highdays and Holidays* [ano. H. Funado] (Tokyo: Kinseido, 1983) 64.
- 17) Tad Treja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books 1987) 277.

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural
Background of the English & the Americans—(17)
IV The Year's Celebrations Part 6: On the Customs and
Superstitions of Lammas, Harvest Festivals, Halloween,
Guy Fawkes Night, and Thanks Giving Day, U.S.A.

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of the College of Life Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2008)

We know that when people lead a customary life every day, they are apt to become stereotyped. In order to keep their bodies and souls more active, they need some pleasant events, or festivals, in their life which will give themselves moderate tension, much vigor, and above all, lots of fun. People in any time and place seem to have had such festivals in a variety of ways.

In the present writing, we would like to speculate on the customs and various superstitions of several festivals —Lammas, Harvest Festivals, Halloween, Guy Fawkes Night, and Thanks Giving Day, U.S.A.

As we examine the customs and superstitions of these festivals, we would like to have a better understanding of the cultural background of English and American people.